ほのぼの

第31号
平成24年
7月

発　行
神戸市須磨区戎町1－2－3
TEL.078－732－5209
信行寺門信徒会

# まけてたまるか

住　職

九州福岡に昇地三郎という百五歳で元気はつらつの男性がいます。九九歳から毎年外国へ講演に出かけているという教育学者です。「生きているだけが能じゃない」とか、「人生は自分との戦いである」を信条にした生き方をしている人です。

普通は他人に勝つことに力を入れるだけで、自分に克(か)つことなど眼中にありません。自分の欲望に克つことを見失った生活を、ただ、だらだらと繰り返し、そのことについて疑問さえ持ち合わせておりません。恥ずかしいことですが。

その人の健康の秘訣は、母親に「食事は三十回噛んで食べなさい」といわれたことを忠実に守っていることと、夏冬にかかわらず毎日、冷水摩擦をしていることだそうです。誰でもまねの出来ることではありませんが、つねに前を向いて、使命感をもって生きておられる姿勢は学ぶことが出来るように思います。

「不養生の者は、死する際に気ぬけてうろたえまわり、よく死ぬことは出来ぬものなり。養生するとは、死をよくせんが為なり」とは徳川家康の主治医をしていた曲直道三の言です。「寿命(いのち)長ければ、恥辱（はじ）多し」といわれますが、老いはどんなに努力しても止まりません。

自分で出来ることがあるとすれば、第一に、不養生をせず、病人にならないように気をつけることでしょう。もちろん気をつけていても病気にはなりますが、「もうだめだ」と思って、落ち込むよ

うな病人にはならないようにしたいものです。病気に「まけてたまるか」と、ぎりぎりまで踏ん張る心意気を持ちたいものです。人は気力で生きているのですから。

第二に、嫌われないようにすることです。それには、身の周りをきれいにすることです。きたない所には人はよってきません。また、愚痴をいわないようにすることです。楽しい話は聞きやすいが、愚痴を聞きたい者はおりません。過去の会社での地位や、栄光にしばられないようにしたいものです。「昔はこうであった」といくらいっても虚しさが増し、ますます自分をみじめにするだけです。このような今の自分に「まけてたまるか」の根性を持ちたいものです。人が生きているのは今を生きているのです。今が大事です。

人に特別好かれる必要はありませんが、嫌われないように気をつけたいものです。

第三に、感謝の気持ちを忘れないことです。家族に、親に、先祖に、有縁の人に、阿弥陀様に。「いのち」は、「いのち」から生まれます。「いのち」は、守られ、育まれ、支えられてはじめて生きておれます。だから、「ここに・今・自分」が生きているのは、守ってくれている人がいるからです。自分ひとりの力だけで生きている者はこの世には一人もいない事実を教えてくださるのは、阿弥陀様だけです。

## 一人一人心をこめて写経、そして納経

坊　守

二千五百年前に、お悟りを開かれたお釈迦様が、私たちを正しい道に導くために説かれたのが「お経」です。

お釈迦様が説かれたお経は、その数の多さから八万四千の法門ともいわれますが、総称して「一切経」といいます。「一切経」はさらに「浄土の三部経」におさまります。

親鸞聖人はその本意を百二十句・八百四十字におさめられ、『正信偈』と名づけられました。したがって、『正信偈』を書写することは「一切経」を書

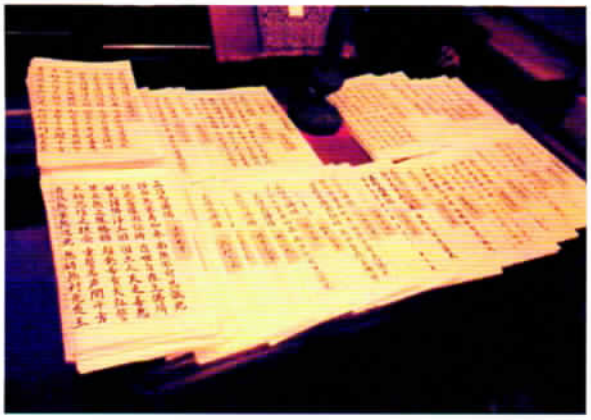
写したことと同じ意味を持っています。

お釈迦様の説法は、最初お弟子方により暗記されて伝えられ、護られてきましたが、お釈迦様が涅槃に入られた後、文字で表されるようになり、お経を書き写すという「写経」が始まりました。それでインド・中国・朝鮮を経て、日本にまでお経が伝えられてきたのです。

この度、東日本大震災による犠牲者を悼み、その復興を哀心より願う思いや、一人ひとりが、さまざまな願いと思いをこめて、一字一字、丁寧に書写され、仏様の心にふれられました。心に響くことばがあったと存じます。みなさまが写経された『正信偈』が、四月八日の「花祭り」の日に、お寺に納まることにご縁の深さをおぼえます。

初めてのことで、緊張と戸惑いもあったでしょうが、写経の後で、「とてもありがたく、うれしかった」「普段、こんなに集中してものごとをすることがありませんでした」「読んでいるときより、書いてみると心に強く残りました」などの声を聞きますと、とてもありがたいことでした。

写経された『正信偈』は、桐の箱に入れて阿弥陀様のお立ちになられている須弥壇に納めさせていただきました。今後は、子供さんやお孫さんが信行寺にお参りになられたなら、阿弥陀様に手を合わすとき、写経されたみなさまのお心にも手を合わすことになり、ご縁を結ぶことになります。有り難いことです。ご苦労さまでした。



『正信偈』の写経

花まつり

# 十周年記念 第十一回信行寺門信徒会総会

久納　惠弘

四月二十八日（土）午後二時より門信徒会の総会が開催されました。六十名の出席と百九十二名の委任状により、会員数の過半数に達し総会が成立しました。

総会では、二十三年度事業報告及び会計報告、二十四年度事業計画（案）及び予算案、二十四～二十五年度役員改正案の審議を行い、異議なく承認されました。

総会の前後には、住職の法話のほか、発足十周年を迎えた「信行寺門信徒会」の記念行事として、今春小学一年生に入学した子供さんを招き、お祝い会が行われました。みやび会コーラス部及び新一年生三名の皆様により「一年生になったら」他二曲の合唱もございました。

また、門信徒会役員の空早苗さんが所属される「道しるべ」グループによる紙芝居「須磨むかし物語」があり、神戸の地名の由来などを勉強させて頂きました。最後に希望者による会食をし、和やかな内に終了いたしました。

新一年生の皆さん

「道しるべ」グループの紙芝居

# 「妙好人　因幡の源左さん」

副住職

源左さんは鳥取県の浜村温泉にちかい山間の小さな村で生まれ育ったお百姓さんで、読み書きはできなかったのですが、十八歳のときに父親をコレラでなくしたのを縁に、法話を本気で聴くようになったと言われています。

四十歳で亡くなった父親が死の直前に「おらが死んで

淋しけりゃ、親をさがして親にすがれ」と言いのこしたそうです。その言葉をたよりに、どうやったら父親の遺言の「親」にあえるのか、「親」にすがるとはどういうことなのか、十年あまりも聴聞を重ねましたが、悶々とした日々が過ぎていきました。そんなある夏の朝、牛をつれて裏山に草刈りに行きました。刈り取った草をいくつかに束ねて牛の背にのせて帰るのですが、全部のせたら牛がつらいだろうと思い、少しだけ自分が背負って帰りました。ところが、途中で腹痛になり、どうしようもなくなって、背負っていた草のたばを牛に背負わせました。そのとたん体が急に楽になって、同時に心が開けるような気持ちになりました。「ふいっと、わからしてもらったいな」と源左さんはその時のことを語っています。

私のすべてをそっくりそのまま引き受けるという「親」、その御手にいだかれている私。そのことを源左さんは牛をご縁にわからせてもらったというのです。

八十九歳の高齢で往生されるまで「源左、助くる、の一声だけのう」「ようこそ、ようこそ、なんまんだぶ　なんまんだぶ」が口ぐせでした。「源左助けるぞ」という如来さまの呼び声に「はい」とうなずき、「ようこそ、ようこそ」と味わっていかれたのです。

源左さんと同じ鳥取出身の私の祖母が晩年に同じように「ようこそ、ようこそ」とつぶやいていたその声を思い出すこの頃です。

## 「妙好人　源左さんゆかりの願正寺参拝」

空　早苗

六月二十一日・二十二日、「妙好人・源左同行と水の都松江を訪ねる旅」がありました。板宿を出発する時は雨が降っていましたが、山陰に近づくにつれ雨がやみ始めました。さすが信行寺の行事は必ず「信行寺晴れ」です。

初日は法然上人生誕の地「誕生寺」を参拝いたしました。松江では小舟で松江城の「堀川めぐり」を楽しみました。翌日は願正寺を参拝し住職様から源左さんの言行をお聞きし、心に残る言葉をいただきました。

# 本願寺新報

信行寺住職の三男秀爾さんの東北被災地での活躍が、本年四月一日発行の「本願寺新報」に「ひと神戸の人たちの代表で」という題で掲載されました。以下その本文をご紹介します。

東京都の被災地支援の一環で、派遣教員として昨年五月からこの三月まで、宮城県石巻市立広渕小学校で六年生の担任を受け持った。

十七年前の阪神・淡路大震災で被災した。自坊の神戸市須磨区・信行寺は、地震直後の火災で全焼。長い避難所生活を送り、全国のボランティアから支援された。「いろんな人に助けられた感謝の気持ちは忘れない。今回は、被災地の役に立てる縁をいただきありがたかった」

龍谷大学卒業後に都の教員となり、昨年三月の地震時は、海外教育交換プログラムで北欧フィンランドの小学校で日本文化を伝えていた。帰国し、都の公募を見てすぐに応募したという。

「地震はインターネットで見ていたが、実際に石巻に来て惨状を見て、神戸の地震を思い出した。津波被害という違いはあるが、瓦礫の山や生活感のなくなった風景は同じように感じた」と振り返る。

広渕小学校は海岸から六キロほど内陸部にある。大きな被害はなかったが、体育館は避難所となり、転校生を受け入れていた。「赴任初日の給食はパンと牛乳だけだったが、徐々におかずが増えてきた。九月に温かいカレーが出た時は子供たちと一緒に喜んだ」

地震から一年たった三月十一日、自らの震災体験をあらためて語った。「いろんなものがなくなり、壊れてしまったが、人と人との絆は壊れないものだと知ってほしかった。一期一会を大切に、今を生きることがどれだけ重要かを子供たちに伝えたかった。神戸の人たちの代表のつもりでやってきた。そんな一年だった」

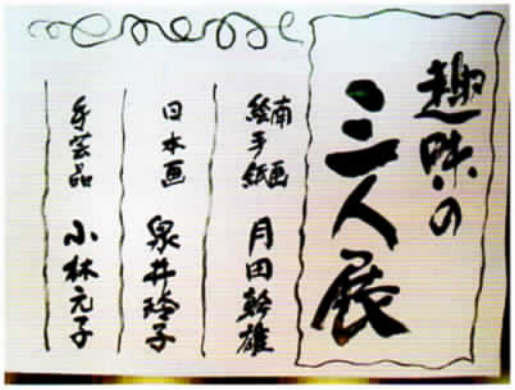
四月からは東京都の小学校に戻る。　三十七歳

# 趣味の三人展

（平成二十四年四月八日～二十八日）

「絵手紙」・「水墨画」・・・・・・・・月田　幹雄
「日本画」・・・・・・・・・・・・・泉井　玲子
「手芸品」・・・・・・・・・・・・・小林　元子

先般、信行寺で門信徒会の浜尾千代子さんの「押し花」展が開催され大好評でした。今回、浜尾さんの作品を見て私たちもささやかな作品を持ち寄って展示しました。



泉井さん・月田さん・小林さん

月田幹雄さんの作品

泉井玲子さんの作品

小林元子さんの作品

# 信行寺行事予定とご案内

## 本堂納骨お盆法要

八月十六日（木）
午後二時より　本堂にて

## 夏期特別法座

八月十七日（金）
午前十一時から午後三時
信行寺　本堂・礼拝堂にて

## 秋の彼岸法要

九月二十九日(土)　高田慈昭先生
三十日(日)　住職
両日とも二時より　本堂にて

## 西大谷納骨参拝

十月二十一日（日）
バスでご一緒いたしますので
ご参加希望の方はお早めに
お寺にお問い合わせください。

## 編　集　後　記

昨年五月石巻市立広渕小学校へ派遣教員として赴任された、信行寺の秀爾さんの記事が紹介されました。その中で特に印象に残った言葉が『実際に石巻に来て惨状を見て神戸の地震を思い出した。瓦礫の山や生活感のなくなった風景は同じように感じた』『いろんなものがなくなり、壊れてしまったが、人と人との絆はこわれないものだと知ってほしかった。一期一会を大切に、今を生きることがどれだけ重要かを子供たちに伝えたかった』でした。きっと秀爾さんの生の声は、子供たちにとって大きな宝物となったことでしょう。

住職も法話の中で「明日も命があるかどうか分からない中、私たちは人との縁の中で今日を生きている」とよく話されます。当たり前と思っている日々の暮らしがどれほど有難く、又大切にしなければならないか、改めて肝に銘じたいと思います。

♪　六字のみなをとなえつつ
♪　世のなりわいにいそしまん

眞宗宗歌の一節が浮かびます。

多田　清子